

《翻訳》

エリザベス・ビショップの詩

沼田綾子訳

地図 The Map

陸は水中にある それは陰りのある緑  
その両側のふちにあるのは影 それとも浅瀬か  
藻がしげった 岩だなの縞もようが ひとすじ見える  
そこに みどりの藻がたれて まじりけのない水色に変わる  
それとも 陸は身をかがめて 下から海をもち上げるのか  
自分のまわりに 海を乱さずに引き寄せながら  
きれいに日焼けした砂州にそって  
陸が 下から海をたぐりよせているのか

ニューファンドランドの影は 平べったくひっそりと 横たわる  
ラブラドル島は黄色 そこでは エスキモーが夢心地で  
油を塗ったところだ この美しい入江を  
そっと撫でれば ガラスの中に 花がぱっと咲き  
澄んだ水そうになって 魚がひそんでいるかもしれない  
海辺の町の名は 海のほうに走りぬけている  
都市の名前は となりの山脈をよこぎる  
——地図を刷る人は ここでは 仕事を忘れて

沼田

思わずわくわくしてしまう

半島は 親ゆびと人さしゆびで 海水をつまむのだ  
女が 反物の滑らかさを そっと触ってみるように

地図の海は 陸よりおだやかだ

それは波が その形を陸に貸しているから

ノルウエーのウサギは あわてて南に走り

その横顔が 海を探索する そこには陸がある

国ごとに 好きな色が選べるのか それとも あらかじめ決まっているのか

——それぞれの特徴や まわりの海には何色が 一番ふさわしいか

地形は ひいきをしない 北は西とおなじ距離

地図製作者の色は 歴史家の色より もっとやさしい

想像の冰山 The Imaginary Iceberg

船より冰山がむしろいい

たとえ旅の終わりとしても

雲の巖のように じっと立ったままでも

海ごと 動く大理石としても

船より冰山がむしろいい

雪が 水に溶けず横たわるように

船が 難破しようとも

むしろ息づく この雪野原がほしい

おお 巖かなただよう平原よ

知っているか 冰山がおまえと共に眠り

目覚めるとき おまえの雪の牧場で草をはむと

これは 船乗りが恋こがれる光景だ  
船は忘れられる 氷山はそびえ立ち  
また沈む そのガラスの尖塔は  
空のたよりなさを矯める＊  
舞台をふむ役者が 巧まずして雄弁な  
そんな場面だ 粉雪のカーテンは  
軽く らせん模様をつくる  
ごく細いロープでさえ上がる  
この白い切っ先の才人は  
太陽と火花をちらす 氷山は己の重さを ものともせず  
移動舞台にどんとおき 立ったままみつめる

氷山は 切り子面を 内部からカットする  
墓のなかの宝石のように  
それは永えに 己をまもり 己のみを飾る  
海につもり われわれを  
おどろかす雪の飾りもするだろう  
さようなら と呼びかける さようなら  
船は舵をとり 離れていく  
そこでは 波と波がぶつかりあい  
雲が もっと暖かい空へ移動する  
氷山には 魂がお似合いだ  
(両者とも見えない元素から 自らを作っている)  
そのような氷山を見て 魂はよろこぶ しっかり肉付けされ  
美しく 分かちがたく 屹立しているから

沼田

\* 省略記号 (elliptics) を補正するという意味もある。つまり 空と海の境界線があいまいな光景 (省略記号) を氷山が正すという意味である。

シャロットの紳士

The Gentleman of Shalott

どっちの眼が 彼の眼か  
鏡にくっついているのは  
どっちの腕か  
どちらか一方が  
目立っているとか  
ちがった色をしているのではないのだから  
それに 足と足  
腕と腕など  
この組み合わせの中に  
全く知らないヤツに 出くわすこともない  
彼の気持ちとしては  
いわゆる背骨という  
どこか 一本の線ずたいに  
写った映像に  
すぎないのさ  
  
ひかえめにも 彼は感じた  
自分の半分は  
カガミ なのだ  
というのも なぜ自分は

二つ揃ってなくてはいけないんだ  
自分のからだの  
真ん中からむこうは鏡なのか  
というより からだの端というべきか  
けれども どっちが  
鏡の内か 外か  
とんと わからない  
まちがう余地は ないも同然  
しかし その証拠もない  
もし 頭の半分が 写ったものなら  
考えは 少々狂ってくるかもしれぬ

しかし 彼は こんな無駄のない  
デザインには お手上げだ  
もし 鏡が すべるとしたら  
切羽つまる  
一本足 になったりして でも  
鏡が じっとしている間は  
歩いたり 走ったりできる  
その上 彼の両手は おたがいを  
つかむこともできる 「実にあいまいで  
うきうきしますなあ」と彼はいう  
いつもいつも 調節を強いられる  
あの感覚が こたえられない 彼は  
いま こんなふうに言っていると 思われたい  
「半分で結構」

沼 田

マンモス  
人蛾

The Man-Moth

ここ 地表では  
ビルの割れ目が ひしゃげた月の光でいっぱいだ  
人間の影は 帽子ほどの大きさ  
人形が立つ円台のように 彼の足元にある  
そして彼は さかさまのピン  
月に引き寄せられる 磁石の針なのだ  
彼は月を見ない 見るのは月の広大な所有地  
月の不思議な光を 手に感じながら その光は暖かくも  
冷たくもなく 寒暖計では計れない温度

けれど <sup>マンモス</sup>人蛾が  
ひょっこり 地表に出てくるとき  
月は やや違って見える  
歩道のはじの割れ目から 這いだし  
彼はビルの顔を おそろおそろ登り始める  
月を空のてっぺんの 小さな穴だと思う  
おかげで 空は屋根の役はしない  
彼は身ぶるいすが 出来る丈高く登って 探らねばならない

建物の正面を登る  
写真屋の被り布のように 影を引きずりながら  
彼は こわごわよじ登る 今度こそ 何とか  
あの まるくぽっかり開いた穴へ 自分の小さな頭を突き出そうと  
黒い巻物になって 筒の中から 光のほうに向かおうと\*

(下に立っている人間は そんな幻想は持たない)

けれど人蛾<sup>マンモス</sup>は 一番恐れていることを 強いられる  
もちろん彼は失敗する おびえて墜落する が 怪我ひとつしない

それから帰る

住家とする うす暗いセメントの地下鉄へ 彼は ヒラヒラ翔び  
パタパタはばたく ところが 音もなくすべり込んでくる  
自分にぴったりの速さの電車には乗れない 扉はすっと閉まる  
人蛾<sup>マンモス</sup>は いつも逆の方を向いてすわる  
すると電車は あっというまに フルスピードで発車する  
ギアを変えることも じょじょに速度を増すこともなく  
後ろ向きに動く速度が 彼にはつかめない

毎晩 人蛾<sup>マンモス</sup>は

人工トンネルを運ばれ 繰り返される夢を見なくてはならない  
ちょうど電車の下で 枕木が走ってるように 夢はいつも  
頭の中をつっぱしる 彼はこわくて窓を覗けない  
とぎれることのない毒が 第三のレールのように  
彼の横を走っているから それは病気だと思う  
その病気にかかりやすい性質を 受けついでいる 彼は両手をポケットに  
ずっとつつこんだままだ 他の人がマフラーを巻くように

もし 彼を捕らえたら

その眼に 懐中電灯をあててごらん それは真っ黒な瞳孔だ  
夜そのものだ 彼が見返すと その毛の生えた 地平線は  
きゅっと緊張し 眼を閉じてしまう すると 瞼から  
一粒の涙が 彼の唯一の持ちものが 蜂の針のように すっとすべり出す  
彼はこっそり それを手のひらに隠し あなたがうっかりしていると  
呑みこんでしまう けれど じっと見つめていれば 渡してくれるだろう

沼田

地下の泉から湧き出たように冷たく 飲めるほど澄んだその涙の一粒を

\* ニューヨーク タイムス (1936) に載った記事のミス・プリント (Mammoth を Manmoth) からインスピレーションをえて創作された詩

\* 絵の具のチューブから出るように 渦巻きもようになって 捻り出されよう という意味もある

夜ふけのしらべ Late Air

魔術師の 真夜中のたもとから

ラジオの歌手が

ラブソングを ぱあっとばらまく

露にぬれた芝生の上

かれらの的を得た憶測は すべて信じたくなる

占い師の 当てずっぽうのように

けれど 海軍工廠<sup>しょう</sup>のアンテナの上には

夏の夜の恋人たちのために

もっとすてきな立ち会い人がいる

五つの遠くはなれた赤い灯<sup>ともしび</sup>が

ともっている 不死鳥<sup>フェニックス</sup>は

こっそり燃え続け そこに 夜露はしのびこめない



ノヴァ スコシアの初めての死      First Death in Nova Scotia

さむい さむい 広間に  
お母さんは アーサーの柩を  
そっとおきました その上には  
お妃さまのアレキサンドラと一緒に 皇太子エドワードと  
王妃メリーと一緒にジョージ五世の  
石版刷りの肖像画が かかっています  
その下にあるテーブルには  
アーサーのお父さんの アーサー伯父さんが  
仕留めて はくせいになった  
アビ\*が 立っていました

アーサー伯父さんが  
鉄砲のたまを打ちこんでから ずっと  
アビは一言も シャベりませんでした  
白い凍った湖  
大理石のテーブルの上で  
じっとだまっていました  
アビの胸は 白くふわふわで  
冷たく そっと撫でたくなるのでした  
その眼はほしくなるほど きれいな  
赤いガラスでした

「いらっしゃい」と お母さんが言いました  
「こっちに来て かわいい従兄弟のアーサーに  
さよならをおっしゃい」

沼田

わたしは抱き上げられ  
スズランを一本 持たされました  
そして それをアーサーの手の中に 持たせました  
アーサーの 柩は  
小さなフロスト・ケーキでした  
そして 赤い眼のアビは  
白い凍った湖から じっと見ていました

アーサーはとても小さくて  
色をまだぬっていない  
人形のように まっ白でした  
霜小僧（ジャック・フロスト\*）が  
かえでの葉\*を真っ赤にぬるように  
アーサーをぬり始めていたのです  
ちょうどアーサーの髪に 色をつけ始めたばかりでした  
髪の色を ほんの少しばかり 赤く染め  
ジャック・フロストは すぐに 絵筆を放おってしまい  
アーサーは 白いままになったのです 永遠に

やさしい王さまの家族は  
赤い服とテンの毛皮で 暖かそうでした  
みんなの足元は ご婦人方の  
テンの毛皮のすそに 埋もれていました  
その方々はアーサーを 宮廷のいちばん  
小さい小姓になるように お招きになったのです  
でも どうしてアーサーが行けるでしょう  
小さなスズランをにぎりしめ  
目をあんなにしっかり閉じて

雪のふかく降りつもった道を

\* アビ 水鳥の一種

\* ジャック・フロスト 霜の総称

\* The Maple Leaf (Forever) カナダの国章

エリザベス ビショップ Elizabeth Bishop (1911—1979)

アメリカの詩人。マサチューセッツ州ウスター生れ。ヴァッサー・カレッジ卒。各地を旅し、ブラジルには二十年ちかく在住した。「北と南」(1946)で認められ、その後「冷たい春」(1955 ピュリッツァー賞)、「旅への疑問」(1966)、Geography III (1977) などの詩集がある。地理意識にあふれた、鋭い印象的なイメージをもつ詩で高く評価される。技巧にもすぐれ、自然界や人生への深い洞察にも、独特のウイットとスタイルが認められる。